

## 中世のイベリア半島

小澤実 歴史家

Minoru Ozawa

中世イベリア半島の歴史はなかなかに複雑である。今までこそわたしたちは、ポルトガルとスペインといふ二つの国家が、ヨーロッパ半島西部に突き出すこの山がちの半島を分かつ姿を目にしている。しかし、おおよそこの二つの国家による分立というかたちができたのは、一四九二年という、中世も終わるうとするその時である。しかし、中世のイベリア半島は、いくつもの君主国が生成消滅し合從連衡する世界であった。ここでは都市レオンにサン・イシドロ修道院が建つ以前にまでたちかえり、この修道院の來し方をたどってみたい。

中世以前にさかのぼろう。属州ヒスパニアと呼ばれたイベリア半島は、ローマ帝国の一翼として、ローマ法とラテン語によつて統治される地中海帝國に組み込まれた。その後、五世紀には、ゲルマン人の一派である西ゴート人が、ビレネー山脈を超えて流れ、この地に定着した。彼らはトレドを首府とする西ゴート王国を建国し、ローマの法と文化を継承した効率的な国家運営をおこなつた。王国はキリスト教を受容し、何度も教会会議をひらき、キリスト教中心地の一つとして名を馳せた。ローマ文明の繼承とキリスト教文化の隆盛は、イベリア半島を、初期中世随一の文化空間へとしたあげた。その結果として、何人の著名な学者も輩出された。中世

を通じて最高の百科全書とされる『語源論』を通して、セビーリャの司教、聖イシドルス（五六〇頃—六三五）もそのひとりである。

キリスト教文明の先進地が一変するのは、七世紀前半、中東に成立したイスラーム教によってである。

エジプトから北アフリカを席巻したウマイヤ朝の一部は、ジブラルタル海峡を越えて北上した。七一年、襲撃を受けた西ゴート王国は滅亡した。その後、七五〇年に成立したアッバース朝に追い立てられるよう、旧支配王朝であるウマイヤ朝の一派はイベリア半島に移動した。後ウマイヤ朝とよばれる新王朝は、イベリア半島の南に位置するコルドバを首府とし、その勢力圏を北へ北へと拡大し続けた。後ウマイヤ朝は、豊かなイベリア半島の蓄積を吸収しながら、アッバース朝に勝るとも劣らない高度なイスラーム文化を展開する世界を現出せしめた。アル・アンダルスとよばれるイスラーム文化圏が成立したのである。その一方で、西ゴート王国の末裔らが逃げ込んだキリスト教徒の住む地は、いまやイベリア半島の北端に限局されていた。この時以降、中世イベリア半島の歴史は、キリスト教徒の側に立つて極度に単純化した見方をするならば、クルアーンとモスクで彩られるアル・アンダルスを聖書と教会で塗り替える再征服運動（レコンキスタ）という動きの中

に突入することになる。

イスラーム教国とキリスト教国がせめぎ合う九年、ガルシア一世によって都市レオンを中心におとと、レオン王国はアル・アンダルスや隣接するナンド一世により併合され、カステイリヤ・レオン王国が成立する。かつて威光を放つていた後ウマイヤ朝は一〇三一年に滅亡し、アル・アンダルスはタифア諸国とよばれる数十の小権力に分立した。フェルナンドはこうした小権力にパーリアとよばれる貢納金を課し、影響力を拡大した。

一〇六五年に即位した、フェルナンドの息子アルフォンソ六世の治世は、カステイリヤ・レオン王国にとって一つの画期となつた。王は、一〇八五年にタイファ諸国の一つであるトレドを攻略し、クリュニ修道院に多額の寄付を行い、教皇庁の改革を進め、教皇グレゴリウス七世とも連絡し、古代地中海世界の支配者を想起させる「全ヒスパニアの皇帝」という称号を用いた。ビザンツ皇帝そしてドイツ皇帝とならぶ、第三の皇帝である。もつとも、その肩書きの権威は自らの支配領域の外部に及ぶものではなかつたが、複数の宗教を束ねようとのアルフォンソの意図が反映した結果でもあつた。この時代のトレドでは、キリスト教・イスラーム教・ユダヤ教という三つの一神教団体が共存し、のちの一二世紀ルネサンスにおける翻訳活動を予兆させる素地がつくられた。スペインを代表する中世文学『わがシ

「ドの歌」で知られるエル・シッド（ロドリーゴ・ディアス・デ・ビバル）が活躍したのも、アルフォンソ六世の時代である。

サン・イシドロ修道院の成立と展開は、かように複雑な政治状況に置かれていた。少し時代をさかのぼろう。レオン王家のエルビーラ王女は、九二五年にコルドバで殉教した聖ペラギウスの聖遺物を、レオンに移動させた。そこに聖ペラギウスに捧げられたサン・ペラーヨ（聖ペラギウスのスペイン語読み）修道院が建設された。これがそもそものはじまりである。

イベリア半島北部にあるレオンもまた、南方からイスラーム勢力によって度重なる襲撃をうけていた。アルフォンソ五世の時代、レオンに建立されたサン・ペラーヨ修道院もまた被害を受けた。聖ペラギウスの聖遺物はより安全と判断されたオビエドに避難させ、一〇二八年には、新しい主人が鎮座することになった。ローマから洗礼者聖ヨハネの聖遺物が持ち込まれたのである。聖ペラギウスがコルドバでの殉教者というローカルヒーローである一方で、洗礼者聖ヨハネは、新約聖書にもその名が記される、キリスト教会全体において普遍的な価値を持つ有名人であった。

しかしこの修道院の主人は三たび変わる。レオン司教アルヴィートは、タイファ国のひとつであるイベリア半島南部のセビーリャに、三世紀に当地で殉教した聖女ユスターの聖遺物を入手する旅に出た。街へ到着し、詩篇を唱えている時、アルヴィートは微

睡んだ。その時、夢でささやきかけるものがいた。

「神聖なる聖女ユスターの遺体をここから持ち帰らんとするために、汝が連れ合いとともにこの地にきたことはわかっている。しかし、聖女が旅立ってしまったこの街の人々は嘆き悲しむだろう。それは神の意志ではあるまい。かといって、手ぶらで帰つて汝を苦しめるのも神の愛の望むところではない。汝が汝の街に持ち帰るのは、わが身体である」

アルヴィートがおまえは誰かと問うと次の答えが返ってきた。

「私はヒスパニアの博士にしてこの街の司教たるイシドルスである」

『聖イシドルス奉遷譚』に記される聖遺物移送の経緯である。かくしてセビーリヤから持ち帰られたイシドルスの聖遺物は、一〇六三年一二月二二日、時の君主フェルナンド一世と王妃サンチャ（？—一〇六七）により、修道院に収められた〔62—63頁〕。わたしたちの知るサン・イシドロ修道院はここに成立した。この修道院は、その後、レオン・カステイーリヤ王国の王室墓廟として、重要な役割を果たすことになるだろう。

聖ペラギウスはコルドバから、洗礼者聖ヨハネはローマから、そして聖イシドルスはセビーリヤから、このレオンの地に到達した。レオン王国などイベリア半島の片隅の小国と思いがちであるが、修道院に

まつる聖遺物ひとつをとつてみたとしても、かようならダイナミックな移動のあとを見て取ることができ。それはこのイベリア半島北西部の都市に、様々な人の流れがあつたことを裏付ける証拠である。

そして続く時代は、さらにレオンへの人の流れが激しくなる。すでにみたアルフォンソ六世は、二人の娘をフランス貴族と妻合わせることでフランス在地諸侯とより深い関係をとりむすび、サンチャゴ・デ・コンポステーラの聖堂改築にも資金を提供した。サンチャゴ巡礼路の経由地として、サン・イシドロ修道院のたつレオンも、賑わっていた。一一世紀初頭の『レオンの都市法』によれば、レオンには市場も開かれていた。ここでは、近隣で生産された产品だけでなく、イスラーム商人やユダヤ商人により、遠隔地の絹などの奢侈品もまた取引の対象であった、といふ。

サン・イシドロ修道院の立つレオンは、ローマ、西ゴート、イスラーム、ユダヤ、フランスと、複数の文化もたらす要素が積み重なつていた。しかし、サン・イシドロ修道院は、さらに別の文化との接触も証言する。ヴァイキングの文化である。なぜと驚く人がいるかもしれない。しかし、サン・イシドロ修道院付属美術館に、およそ一〇世紀ごろのものと考えられる、スカンデナヴィアの美術様式で彫刻された聖遺物箱が伝来している。どのような経路を経てここにたどり着いたのか不明ながら、イベリア半島における唯一のヴァイキング美術の例として、今まで目にすることができる。わたしたちはしば

しば忘れがちであるが、レオン王国の北端はビスケー湾に面している。九世紀にはすでにヴァイキングがイベリア半島を回って地中海に達したという記録が残っているし、一〇世紀のブリテン諸島のあちこちは、ヴァイキングのコロニーが成立していた。彼らの一部が海を越えてレオン王国に立ち寄っていたと考えるのが自然である。ましてや異国の产品が手に入る国際市場があるとするならば、なおさらである。海域は、あたらしい文化が流入する重要なアクセス経路である。

わたしたちは、中世のイベリア半島といえば、キ

リスト教徒がイスラーム教徒の土地を再征服するレコンキスタを想起する。その過程で、キリスト教とイスラーム教という二つの宗教が相克し混交したことで、一二世紀ルネサンスでのアラビア語文献がラテン語に翻訳され、コルドバのメスキータそしてグラナダのアルハンブラ宮殿といった建築が生み出された。しかし、その再征服運動は突如始まったわけではないし、再征服運動だけが中世イベリア半島の歴史でもない。サン・イシドロ修道院の歴史は、より豊かな中世イベリア半島の姿を垣間見させてくれる。

サンチャヤの目的は王宮附属聖堂の権威化でした。聖イシドルスは西ゴート王国時代のセビリアの司教です。その遺骨を護持することで、レオン王国が西ゴート王国の繼承者であることをしめそうとしたのです。

聖イシドルスの遺骸は、銀製の内箱と黄金の外箱による豪華な柩におさめられ、聖堂祭壇に安置されました。外箱はのこつていませんが、銀製の内箱はいまサン・イシドロ聖堂の宝物館に展示されています。一部破損した蓋にはフェルナンド一世の像があり、おそらくは王妃サンチャヤの像もあつたはずです。側面には打出し技法で「創世記」の諸場面——アダムの創造から楽園追放までが描かれています。なかでも「アダムに皮の衣を着せる神」がめずらしい[63頁]。

三人の王女  
金沢百枝 美術史家

去年の夏、北スペインの古都オビエドをたずねたとき、けわしい道のりにおどろきました。森はふかく、そびえる岩山は雲上につきでています。じつはこのあたりは「ヨーロッパの頂き」とも称される、二〇〇〇メートル級の山々がつらなる場所。切りたつ岩壁のすきまをぬうようにゆく細道はヘアピングカープの連続で、そこにときおり、大驚が舞いおりてきます。いまから一三〇〇年まえ、イスラム教徒にやぶれ、この山間部までのがれてきたキリスト教徒の困難はいかばかりだったことでしょう。女と子どもたちもつれていたのです。

八世紀初頭、かれら西ゴート王国の落人は、この

ますが、サンチャヤはそれをおさえるためもあり、聖堂建設に尽力し、夫の功績とするのです。

一〇六三年、フェルナンド一世はタイファ国との戦いで勝ち、セビリアを占拠します。休戦後、軍の撤退とひきかえに手に入れたのが、莫大な貢納金と、聖遺物すなわちセビリア司教聖イシドルスの遺骨でした。後者はサンチャヤの意向により、レオンの聖堂(王宮附属聖堂)に奉獻されます。

地で再起します(アストゥリアス王国)。そしてイスラム教徒への反撃をはじめます(レコンキスタ)。戦いは一進一退ながら徐々に南進し、オビエドとのゆきが不便になると、九一〇年、南のレオンに都を移しました。レオン王国のはじまりです。

禁断の木の実をたべたアダムとエ娃を、神は楽園から追放するのですが[62頁]、「創世記」第三章二二節に、ふたりを追いだすまえに神が「皮の衣をつくって着せた」とあります。美術作品においては、追放場面のアダムとエ娃が裸ではなく皮の衣を着ている、くらいなのですが、この柩(聖遺物箱)で